

すべての学習塾・予備校・私立学校でクラシックライブコンサートの定期開催を
—一般財団法人「100万人のクラシックライブ」で考える—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：開倫塾では、すべての校舎でクラシックライブコンサートを開催しているそうですね。

A：はい。一般財団法人「100万人のクラシックライブ」（蓑田秀策代表）と連携させて頂き、2018年度中に100回のクラシックライブコンサートを計画、スタートいたしました。開倫塾の92校舎すべてと、開倫塾日本語学校などを含め、会場はすべて開倫塾の校舎の教室です。約1時間の、バイオリンとピアノのプロの演奏家による本格的な演奏会です。すべての会場で、参加者のすべてを魅了し、大きな感動を生んでいます。

Q：なぜ、開倫塾では、すべての校舎でクラシックライブコンサートを行うことにしたのですか。

A：(1)私の友人で、公益社団法人経済同友会の幹事をなさっておられる蓑田代表から、「100万人のクラシックライブ」の設立の経緯や趣旨、活動の内容をお聞きし、開倫塾のすべての校舎で、1年に1回、クラシックライブが開催できたらどんなに素晴らしいかと考えたからです。

(2)3歳ころからクラシック音楽に親しみ、小・中学生からプロの演奏家を目指し、高校、大学、大学院で音楽を専攻、海外に留学をし、内外の多くのコンクールで入賞を果たし、CDなども出しているプロの演奏家の方でも、演奏の機会があまりない現実と、1年間にクラシックコンサートに参加する市民が極めて少ない、1%以下であるという、2つの厳しい現実を同時に解決するにはどうしたらよいか。

(3)それには、50名前後の少人数のクラシックライブを年間2万回開催し、100万人にクラシックライブをお届けして裾野を広げることが一番だと、蓑田代表たちはお考えになったそうです。

Q：それで開倫塾では、すべての校舎でクラシックライブコンサートをスタートしたのですか。

A：(1)はい。学習塾の教室での、バイオリンとピアノのプロの演奏家による本格的なクラシックライブは、音が身体を突き抜けるという表現が一番合うほど、真に迫る演奏です。

(2)演奏家の指先や細かなしぐさが間近に見られ、クラシック音楽に対する興味・関心が深まります。

(3)演奏の合間の、作曲家や曲の背景を含む、わかりやすい解説も大好評です。バイオリンの歴史や仕組みのお話も、興味が尽きないようです。

Q：このクラシックライブコンサートを成功させるポイントは何ですか。

A：たくさんあります。

- (1)担当責任者は、クラシック音楽が大好きな先生にお願いすることが一番大事と考えます。
- (2)開倫塾では、教務本部長の渡辺博先生が自他ともに認める大のクラシックファンですので、渡辺先生に開倫塾クラシックライブコンサートの担当責任者をお願いし、快諾を頂きました。
- (3)実施する校舎の責任者である校長や副校長、スタッフ、時間講師の先生のご理解、ご協力を頂くことも大切と考えます。開倫塾では、幸いなことに、第13回全国模擬授業大会の前日、5月26日(土)のプレイベントの最初に、全社員の皆様にクラシックライブコンサートを鑑賞して頂き、素晴らしさを実感してもらうことができました。
- (4)ご招待状は、開倫塾で顧客と定義している、塾生・保護者・地域社会の皆様、ビジネスパートナーの皆様、社員とご家族の皆様にお出ししています。
- (5)参加費は、来年、2019年が開倫塾創業40周年であるため、「創業40周年記念クラシックライブ」として無料とさせて頂いています。

Q：開倫塾では、スポーツとしてドッジボールの奨励、文化活動としてユネスコ活動の奨励などを行っているようですが、芸術活動の支援はクラシック音楽ですか。

A：はい。そのとおりです。

- (1)開倫塾のオフィシャルスポーツはドッジボールです。開倫塾では、民間企業としての社会貢献活動として、地域で開催されるドッジボール大会の共催や後援などをさせて頂いています。
- (2)また、開倫ユネスコ協会ははじめ、民間ユネスコ活動の支援協力を積極的に行っています。ユネスコ活動は、平和活動、教育・科学・文化・情報の促進を目指しています。
- (3)この度の、一般財団法人「100万人のクラシックライブ」と連携させて頂いた、開倫塾全校舎での年間100回に及ぶ「クラシックライブ」は、スポーツとしてのドッジボール支援、NGO活動としての民間ユネスコ活動支援に続く、企業としての社会貢献活動です。

Q：これらの支援活動は、これからもずっと行うのですか。

A：「継続は力」と考えます。このような社会貢献活動も、PDCAを回しながら、よりよい内容を目指し、また、イノベーションを継続して行いながら、とりあえずは、2029年の創業50周年までやり抜かせて頂ければ有難く存じます。

Q：学習塾や予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことはありますか。

- A：(1)クラシックのプロの演奏家をお招きしての、50名前後の少人数の本格的な演奏会は真に迫り、大きな感動を呼ぶものです。
- (2)学校法人であればオープンキャンパス、学習塾・予備校であれば周年行事など、さまざまな機会を活用しての本格的なクラシックライブコンサートの定期的な開催をご提案させて頂きます。
- (3)さまざまな分野のプロの芸術家をお招きしての時節に相応したイベントは、多くの感動を呼び起こします。ご無理のない範囲で、また、ご興味・ご関心のある範囲での、プロの芸術

家をお招きした少人数でのイベントを、ぜひ企画して下さいますようお願いいたします。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も先生方がお読みになれば必ずご参考になる本をご紹介します。

(1)1冊目は、藁科満治著「藩校に学ぶ～日本の教育の原点～」日本評論社、2018年4月30日刊です。「藩校を明治維新でなくしたことは失敗であったと丸山真男が言い、全く同感であると、宇沢弘文は応じた。近代国家へと生まれ変わった日本が捨て去った藩校、その輝ける遺産をたどる」力作です。

(2)2冊目は、米倉誠一郎著「イノベーターたちの日本史、近代日本の創造的対応」東洋経済新報社、2017年5月11日刊。近代日本に起きた大変化に日本の企業家たちは、どのような創造的対応を見せたのか。米倉教授、渾身の力作。

(3)3冊目は、内田貴著「法学の誕生～近代日本にとって『法』とは何であったのか」筑摩書房、2018年3月30日刊。日本が西洋の法と法学を受容しようとしていたもっとも初期の法学者である、穂積陳重（ほずみのぶしげ）、穂積八束（やつか）の兄弟を通して眺める、近代日本の草創期を、現代民法学の第一人者、内田先生が熱く語ります。圧巻です。本書に数多く引用されているラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の名著「神国日本～解明への一試論～」東洋文庫、平凡社1976年7月14日刊と併読なされれば、我らの祖国日本とは何かが浮かび上がってきます。

*以上3冊は、大部ですが、読み始めると、手から離れなくなるほど面白く興味が尽きません。「江戸時代中・後期」と「明治維新」、「近代日本」を支えた教育とは何かという問題意識は、現代日本の課題解決にも参考になります。是非、3冊お手に取ってご熟読ください。

2018年5月31日（木）21時23分